

科目「人間の理解」における他者理解と受容に関する教材開発
－ 高齢者の自立と依存の変容プロセスを活用したグループ演習 －

千葉大学大学院 大浦明美 (会員番号 7680)

[キーワード] M-G T A教材・他者理解・受容

1. 研究目的

介護福祉士養成校の在籍者の経歴は多様で、高校卒業後すぐに入学した人、介護実践のない社会人、介護実践のある社会人等である。そのような多様化している学生に配慮しながら、講師は授業を展開している。ところが、学生の中には、身体的介護技術はマスターしているが、心的自立支援の理解が苦手という人を多く見受け、それにより介護実習において、高齢者等に対する関係性の構築や、高齢者の背景把握の浅い人が少なくない実態が見受けられる。そこで、介護福祉士養成校では、個別の自立意識の理解を基本とし、社会的存在としての高齢者等の理解を深める指導が重要となってきた。このような現状課題を踏まえ、本研究では科目「人間の理解」において、既存の高齢者の自立と依存の変容プロセスを用いたグループ演習を行い、学生の他者理解、受容、共感、人間の関係性等の学習を深め、科目「人間の理解」のねらいを効果的に展開する教材の開発を目的とする。

2. 研究の視点および方法

本研究の視点は、科目「人間の理解」の教育内容に沿うものである。一つは「人間の尊厳と自立」で、人間としての尊厳の保持と自立生活を支える必要性について理解し、介護場面における倫理的課題に対応できる能力を養う学習である。また「人間関係とコミュニケーション」については、他者への情報伝達に必要なコミュニケーション能力を養うための学習としている。この2つの教育内容をベースに据え、作成した教材を使用したグループ演習と、演習後の学生の振り返りにより学習教材の使用効果を考察する。本研究の実施期間は2012年5月～6月で、対象者は、D県にあるE介護福祉士養成校の1年次の学生(7グループ・各5人または6人)である。授業方法は次のとおりである。2011年に修正版M-G T Aにより作成した単身女性後期高齢者の自立と依存の変容プロセスを教材として活用し、生徒にはM-G T Aの簡略な説明をした。また、このグループ演習のねらいとして、自立と依存に関する既存のデータを利用し、各グループ内のコミュニケーションを深め、他者理解・共感等のもと、各グループによる自立と依存の変容プロセスを作成することを学生に明確に伝えた。生徒の作業として、①概念の理解、②カテゴリーの生成、③ストーリーラインを描く(文章化)、④結果図を作成、⑤発表、⑥演習の振り返りを行った。

3. 倫理的配慮

本研究においては、グループ演習を実施した学生や、介護福祉士養成校が特定されないよう倫理的配慮がなされている。報告者は、日本社会福祉学会の定める研究倫理指針を誠実に順守する。

4. 研究結果

所要時間は270分(90分×3回)であった。内容は、作業の説明等・①概念の理解・②カテゴリーの生成に90分、③ストーリーラインを描く(文章化)・④結果図を作成(模造紙に書く)に90分、⑤発表・⑥演習の振り返りに90分を要した。また、全てのグループは作業を完了した。単身女性後期高齢者の自立と依存の変容プロセスを活用してのグループ演習において、7グループの作成したカテゴリー名、ストーリーライン、結果図に相違があったことは当然である。

たとえば、あるグループでは、受容のステップである絶望、混乱、拒絶、探索、行動、受容、そして悟りをカテゴリー名にした。つまり、自立と依存は、「混乱」と「拒絶」のカテゴリーで細分化し、「探索」で統合し、また「行動」で再度細分化し、さらに「受容」で再度統合され、「悟り」へと進むという結果図を描いた。また、他のグループのストーリーラインは、女性高齢者が「社会」に参加する中で、「苦労と困難」を乗り越えた人は「幸せ」になり「自分らしさ」を大切にす。超えることができなかった人は「身体的」不安に陥る可能性があり、「他者」との問題が身近な「女性」同士のつきあいにも影響を与える。そして、「パートナー」がいることで「家族」があり、そこに依存への「執着」も生まれるとした(「」はカテゴリー名を表す)。

この演習において、学生にとって難しかった点は、一つに他者の理解があげられる。たとえば、「特に難しいと感じたのは、人の価値観・感性があまりにも違う点である。」、「意見を出し合った時に、みな意見がバラバラで全然まとまらず、とても難しいと感じました。」、「自分には思いつかないような意見がたくさん出て、とてもよかった。それをまとめるのは大変だったが、それぞれの意見が一致した時はとても嬉しかった。」という感想があった。また、コミュニケーション技術については、「もう少し自己主張したほうが良かったのかと反省した。」、「あまり言い出せない。」、「消極的な人をどうやって参加してもらうかが一番大変でした。」等の学生の自己表現・技法の課題があげられていた。

5. 考察

教材によるカテゴリーやプロセスの複数性の理解について、学生はコミュニケーションのやり取りを通して学習した。その経過には、学生相互の定まらない自己覚知と他者理解の模索が繰り返され、それと同時に高齢者の個別性を深めることができた。これらのことから、この教材が有効であり、科目「人間の理解」の枠組みとして役立つことを確認した。